

■ ハーカニヤの砂漠

はやては目を開くと同時、自分の思考に突っ込んだ。なに今のシリアスな夢、なんて理由を考える必要はない。はやては顔に半ば乗っていたハードカバーの本を避け、自分の腹の上を見た。

「うー。」

フローリングの上でうたた寝していたはやての上で、どっかい黒猫が眠りこけていた。

「ハン・・バグ・・。」

ご丁寧に寝言まで言いながら。

はやては髪を軽く搔きながら、陽光の破片が差し込む真つ白い天井を見上げた。壁掛け時計の時刻は午後3時庭から響いてくる鳥の声は少し遠く、耳に響いてくる街の音もぼやけている。

「ちよつとー、すんごー足しびれてるんですけどお。」

はやては脱力したまま、何も聞こえていないであろう三角耳に喚く。案の定、真つ黒い猫の耳は気ままに跳ねるだけで、こちらを向く様子すらなかった。ただ、間延びした寝息が聞こえる。

「これが世に言う、飼い主を布団だと思っっている猫の図、って奴なんか・・。」

下敷きにされてじんじん言い出した両足の指を鈍く動かしながらはやてはぼやく。最初に寝転がったときは、ひんやりしたフローリングが気持ちよかったのだけれど、今となつてははやての体温で暖まっている。そのうえ、こうフェイトにのしかかれては、骨が床にもろにあ

空がのしかかってくる。

何もかも押しつぶそうと、夕日の熱い色に染まって、ゆっくりとはやてを押し潰そうと。

でも、足が動かなかった。

足だけでも潰れてしまっているように重くて、苦しくて、足からゆっくりと痺れが競り上がってくる。

ああ、そうだ。

私の病気は治らないんだ。

知ってるんだ、大人になる前に死んじやうって、本当

は――

知ってるん

「にやあ。」

「夢かい。」

たつて地味に痛い。

「ちようすびすび言うとするし。

猫も寝言いうつて、ほんまやつたんなあ。」

はやての腹の上にも関わらず器用に丸くなっているフェイトの顔は見えない。はやては広がる金髪を手で梳いてやりながら、フェイトの背中に触る。家に来た頃は、ひいき目にみても骨と皮だったけれど、随分と肉がついたものだった。今ではこんなにずっしり重い。

「ほっぺもぶにぶになつたしなあ。」

フェイトが寝ているのを良いことに、はやては今度は頬をつついた。人差し指を張りのある頬が押し返す。はやての服の裾を掴んでいる手もふつくらしている。フェイトにさせているのはやての服も、最初は自分はそのなになにに、今はそれなりに着られている。

明るい表情も増えた。

はやては大きく口で弧を描くと、フェイトの頭を撫でる。耳ごと撫でると、尻尾の先が柔らかく動いた。

「うーん、猫派になりそう。」

なんてはやては口元をにやけさせる。それから首を巡らせて、レースのカーテン越しに空を仰いだ。

大きな雲が流れて行く、真つ青な空。

フェイトが毎日見上げている西の空。

多分、フェイトはもう、元の服は着られないだろう。あれだけ痩せ細っていたから着ていられただけの、明らか

かにサイズ違いの服。一回りも、二回りも小さい女の子用の服。帰る時には着たいとフェイトは言っていたけれど、もう着られない。

はやては喉から込み上げて来たあくびを嚙み殺し、滲んだ視界でフェイトを見た。

そうして、小さな声で呟く。

「こいつ、人のお腹の上でよだれ垂らしおった。」

お腹の辺り、フェイトの口がある辺りがひんやり冷たい。

：

「はやては、料理じようずだよね。」

隣に座るフェイトがはやてを見上げた。

「ん、今更気付いたんかー？

鈍感さんやねえ。」

はやてが頬を指で挟むと、フェイトが耳を頭につけた。「そんなことないよ、最初からそう思ってたよ。」

慌てたようにフェイトがそう主張する。その手ははやての服の裾を掴んで、硬く握られていた。

「えー、本当に本当？

あつやしいなあ。」

はやては口をにやにやさせながら、目を半分に細めた。すると、フェイトは身を乗り出して、はやての上に少し乗っかる。

「本当だよ？」

整った相貌を引き締めるフェイト。その尻で、ふさふさの尻尾が立ち上がった。フェイトはソファに膝立ちになり、はやての上に手をつけて迫ってくる。

「んー、そうやろうか、フェイトちゃん意外と鈍感さんやからなあ。」

はやてはわざともう少し意地悪そうな顔をして、これ見よがしに悩んでみる。

「本当に本当だよ？」

初めて食べたときから、おいしいって思ったもん。」

フェイトは顔を近づけて、じっとはやての目を見つめた。左手がいつの間にかはやての肩を押して、ソファに軽く押し付けている。真剣になると、ちよつと回りが見えなくなるところがフェイトにはある。

「じゃあ、初めて食べたのはなんやったか、覚えとる？」

はやてはフェイトの鼻先に人差し指をおくと、神妙な口調で問い掛けた。フェイトは法廷に立つ証人の様に誠実に言う。

「アジのひらき。」

あと、お豆腐のお味噌汁と、よくわかんないけどピーマンの炒め物もあった。サラダはキャベツとしらすと小口ネギのだった。」

お、完璧、とはやてはフェイトを褒めた。本当の所、はやてはアジのひらきが大きな背骨以外にも残らず食べられてしまったことしか覚えていなかったのだから、花まるに植木鉢を付けてあげても良いくらいだ。でもはやては、手を口元に当てて、悩ましげな声を出す。

「アジのひらき？ 本当にそうやったっけえー？」

サバの塩焼きやったと思うんやけどなあー。気のせいかなあー。」

フェイトが肩を跳ねさせた。大きな目が零れ落ちてしまふんじやないかというくらいに見開かれて、意気揚々と上がっていた尻尾がまるで電池が切れたみたいに勢いよく落ちる。

「え・・・っ。」

フェイトの唇から驚きの呻き声が漏れた。

「そ、いや・・・そんなはず・・・。」

耳が考え事をしているみたいに、左右バラバラに動き回る。目は泳いで、腰が少し退け気味に変わる。

はやては口を覆う手の下で、全開の笑みを浮かべていた。それがバレてフェイトが拗ねたのは、それから3秒後。

拗ね腐ったフェイトは尻尾でしか返事をくれない。名前を呼んでも振り返らないではやてに背中を向けたまま、尻尾を2、3回振るだけ。しかも、はやてはフェイトを自分の膝の間に座らせているから、フェイトが尻尾を振る度に、先つぼが顔面にクリティカルヒットをかましてくれる。ふつかふかでもふもふの衝撃は、驚愕の威

力を持つボディーブローで主に心を抉った。

「フェイトちゃん、ほんまかわいいな。」

はやては呟くと、後ろから思いっきりフェイトを抱きしめた。

「にやあ。」

まだ拗ねているフェイトが不機嫌そうに鳴く。でも、はやてはそれには構わないで、胸の中にフェイトを抱えむと足も閉じて小さい体をすっぽりと中に納めた。

「このフィット感もたまらへんなあ！」

嫌がる声もかわええよ！」

脱力した尻尾が、はやての肩に垂れた。フェイトの心が10メートルくらい遠くに離れる音を聞いた気がするけれど、はやてはそれも無視して、フェイトの頬に頬をくっつけた。耳ごと頭を撫でながら、頬を刷り寄せる。

「拗ねてもかわいいなんて罪な子やねえ！」

そのかわいさで、今までどんだけのいたいけなオネーサン達を魅了して来たんや！」

耳をぐりぐりと撫で回して、もつとぎゅつとくっつくくと、フェイトが尻尾ではやての頬を押しした。

「こんなにべたべたしてくる人、はやてくらいだよ。」

窮屈そうにはやてを振り向いた顔は、頭を撫でられているせいか、いつもの癖で左目が閉じている。

「そうなん？」

いやあ、私が初めての人って、てれるなあ。」
何言ってるの、とフェイトが口を曲げて呟いた。

「えー、だって、こんなにかわいい子といちゃいちゃしとる最初の人やで？ 嬉しいに決まってるやろ。」

はやては無駄に凜々しい顔つきになって、意味なく深い響きを出す。フェイトは片耳だけ伏せると、唇を閉じた。ちよつと歪んだその口は、怒っているのか笑っているのか、左側だけが上がっている。

「変なの。」

フェイトはそう言うとはやての背中に手を回して鼻先を首筋に埋めた。すんすん、と匂いを嗅がれる気配がして、はやては首を竦めて耳まで顔を真っ赤にした。逆U字に曲がっていたフェイトの尻尾が、はやての腕に絡み付く。

∴

窓ガラスに映る日差しの色が朱に染まり始めて、雲が長い陰を空に引き始めていた。

「もうこんな時間かあ、そろそろ夕飯の支度始めなきやあかんかなあ。」

はやてはそう言うって、フェイトを抱えたままソファに寝転がった。

「んっ。」

否応無く横にされたフェイトが不満げに息を呑み込む。はやてはフェイトをお腹の上に乗せて、耳の付け根を人差し指で撫でた。短くて柔らかい毛の肌触りは滑ら

かだった。結局日がな一日フェイトを捕まえていたと内省しながらも、はやては三角耳の裏側を掌で擦る。フェイトの耳が小刻みに動くのを感じた。人の耳に比べたら驚くくらいに薄い耳なのに、確かに温かさを感じる。伏せている時の様に耳を指先で倒すと、フェイトが左目を瞑った。

「くすぐりたいよ。」

そうして逃げようとするから、はやてはもう片方の手を脇に入れてフェイトを捕まえてしまう。歯を見せて我慢げな表情を零すと、フェイトははやての首筋に顔を擦りつけて頭を振った。

「こそばゆいって、もー。」

困った子やなあ。」

はやてはまるで困っていない明るい声音でそう零した。それでも耳を弄るのをやめないでいる。すると、フェイトがはやての手を掴んだ。

「おお？」

フェイトが凜々しい顔つきで、掴んだはやての手とはやての顔を凝視した。何を決心したのだろう、とはやては楽しみでフェイトの次の行動を待つ。午後の日差しを吸って膨らんだ尻尾が、逆Uの字を描いていた。

「私、怒っちゃうんだからね。」

フェイトはそう宣言すると、口をがばっと開いた。

そして、はやての手を甘噛みした。痛くないように力も込めず、でも感触がはやてに解るように歯を立てて、

フェイトははやての人差し指を噛む。時折指先に当たる温かいものは、フェイトの舌だろう。尻尾を振って耳を伏せて、フェイトははやての指をくわえながら、じっとはやてを見上げた。

「ご、ごめんフェイトちゃん、私が悪かった・・・。

せやから、ちよ、それはやめて。マジで。」

降参とばかりに空いている手を挙げると、フェイトが満足そうにしてはやての手を解放した。はやては甘噛みされた指を握り込みつつ、内心で盛大に胸を撫で下ろした。まだ犯罪に手を染めたくはない。

「あんまり撫でたらくすぐりたいんだから、めっ、だよ。」

フェイトははやての上に寝っ転がって、人差し指ではやての鼻先をつついた。上機嫌な耳が元気にこちらを向いている。

「はいはい、わかりましたよーっと。

あーあ、こんなにかわいいのに触れないなんて、なんて辛いんやろ。」

掌を枕に、はやてが長い息を吐いた。

それをフェイトが見つめていた。

そして、目を伏せる。たった、15センチの距離の所で。

「はやては、私が猫の使い魔だから、かわいいの？」

遠くへ放ったような声だった。答えを期待していない類いの声だった。

「どうしたん？ いきなりそんな顔して。」

はやては右手を伸ばし、フェイトの頬に触れた。親指で頬を撫でると、フェイトの左目がこちらを見た。金色の瞳が淡くその瞳を縁取っている。

「私が猫の使い魔だから、やさしくしてくれるの？」

はやてはほのかに微笑んだ。

「違うよ。」

フェイトちゃんが好きやからやよ。」

手で額を撫で上げる。前髪を掻きあげると、小さな白い額が覗いた。

「なんで、私のこと好きなの？」

フェイトが問う。

一枚一枚、木の葉を降り積もらせるように。雨の雫を落とすように、はやてに問い掛ける。

「やさしくて、いい子やからかな。」

はやてはそう答えて、肩の辺りに置かれていたフェイトの手を左手で包んだ。緩く握られているフェイトの手は解けない。

「じゃあ私が、やさしくていい子じゃなくなったら、嫌いになる？」

本当はいい子じゃなかったって解ったら、怒る？」

怯えなど、その硝子の目には無い。はやての回答が知りたいだけの眼差しだった。純真でも、純粋でもなく、ただ答えを見ようとしている目。

「なあに、悪い子になる予定でもあるん？ 不良やね

え。」

口の端を吊り上げると、フェイトが耳を俯けた。

「今まで、マスターの言うお仕事をしたんだ。

なんの仕事かは知らないけど、たぶん、良いことじゃないと思う。」

はやてにとって、それは意外な内容ではなかった。あの雨の日に倒れていた彼女の様子が、すでに何事かあったことを最も雄弁に語っていたからだ。だから、驚いたそぶりもしないで、はやては頷いてみせる。

「そっか。でも私、もうフェイトちゃんのこと好きになっちゃったから。

せやから、悪い子になりそうやったら、止めてあげたい、って思うな。」

フェイトの手が、はやての手の中で小さく跳ねた。

「嫌いにならないの？ どうして？」

はやてはフェイトの手を握った。そうして、はつきりと頷いてみせる。

「うん、もうフェイトちゃんのこと、好きやからね。」

フェイトがはやてを食い入るように見つめた。日が傾いて、顔に濃く陰影が落ちる。夕日に縁取られた横顔だけが赤かった。

「悪い子になっちゃっても、なんで？」

はやては両手をフェイトの方に伸ばした。幼く丸い頬を両手で包んで、穏やかに告げる。

「フェイトちゃんがフェイトちゃんやから。」

肩を寄せて、フェイトが途方に暮れたように口を嚙んだ。よくわからないよ、という呟きだけが最後に聞こえた。

○

「あ！」

はやてが突如として上げた大声に、フェイトがびくつとなつて振り返つた。

「なに？」

家族全員分のお箸手にして尻尾と耳をピンと立てるフェイトに、はやてはえへつと舌を出した。

「醬油切らしてもーた。」

「はやては、うつかりさんだなあ。」

フェイトがそう呟きながら、はやての3歩先を歩く。その足取りは軽くて、街路樹の陰を飛び越えたり、縁石に飛び乗ったりと自由奔放だ。夕方の冷えた風に黒耳がひらひらと揺れて、尻尾が悠然と空を揺く。

「まだ買い置きがあるような気になつとつてな。」

ええやん、特売でお刺身買ったんやから。」

買い物袋を体の脇で振る。低い扉の上に飛び乗つたフェイトが、その音にはやてを振り返つた。肩に少し隠れた口が嬉しそうに曲線を描いている。

「おいしそうなマグロだったね。」

言葉に合わせて、尻尾がちよろつと持ち上がった。

「あのお店は、たまにいいお魚が売ってるんやで。」

ちゃんとメモしとくよーに！」

はやてが学校の先生みたいにびしつと決めると、フェイトが歩き出しながら背中中で答えた。

「はい。」

スーパーから家までの道のりは、裏道に入つてしまえば車は殆ど通らない。太陽の残照すら消えて、青く染まり始めた空には一つ星が輝き始めていた。既に灯つている街灯が、ゆるやかに存在感を増し始める時刻。

「ねえはやて、今度ハンバーグの作り方、教えて欲しいんだ。」

フェイトが街灯の零す光の中に飛び込むと、小首を傾げてはやてを見上げた。

「ん、かまへんよ。」

簡単やから失敗もまずせえへんしな。」

その答えに、フェイトは嬉しそうに頬を染めると、はやての隣に歩み寄つてその手を握つた。柔らかい手の平は、きつと年相応だろう。傷も無く、爪は今朝はやてが切りそろえてヤスリを掛けてやったばかりだ。

「フェイトちゃん、ハンバーグ気に入ったんやね。」

歩幅をフェイトに合わせて、はやてはゆっくり歩く。身長は5 c m低いだけだが、フェイトの歩調はゆっくりだ。

「うん、すごくおいしかった。」

見えないほおひげを広げて、フェイトが笑う。はやては調子を揃えて、ころころと笑い声を立てた。

「私のほっぺたも舐めてくぐらいに好きなんやもんなー?」

フェイトが耳を垂らして頬を染める。尻尾がくるくると自分の足に絡み付いた。

「もう、はやては意地悪だよ。」

拗ねたように頬を膨らませる仕草がかわいくて、はやては繋いでいる手を引っ張ってフェイトを自分に近づけた。顔が間近によって、フェイトがはやてを見上げる。はやてが口を真っ直ぐ引き結んで、なるべく格好良く見えるように表情を引き締めると、フェイトも真剣な顔つきになった。そのまま二人で見つめ合うこと約3秒。

「はやて、変なおおー。」

「こら、凜々しい顔とお言い!」

口々にそう言い合うと、声を出して笑い合った。

日の暮れた、夜になっていく帰り道に二人の笑い声が吹き抜ける。散歩をするみたい、遊ぶみたいな調子で帰っているから、待ちきれなくて空では星が数を増やしている。黒の夜空に未だ残る青さに、星が明滅する。不規則にちらちらと。

「早く帰らないと、もうそろそろヴィータ達が帰って来ちゃうな。ちよつと急ごつか。」

はやてがフェイトを引いて、地面を蹴る。

だが、その手は解けた。

フェイトは立ち止まって、空を見上げていた。夜の気配を孕む湿った風に前髪を吹き上がらせ、長い髪を流し、じつと道に立ち尽くしている。

はやての背中側にある街灯は、フェイトをその円の外側に残す。

「フェイトちゃん。」

青黒い影のような雲が、地平線の方でまだ溶け残っていた。

「ん、ごめん。」

フェイトがはやての方を振り返って駆けてくる。その手で胸元を抑えたまま。

肌が溶けそうな程に静かだ。

月明かりがカーテンの隙間から細く一条走るだけの室内は、物の輪郭が青く薄らと浮かび上がるだけ。だから天井を見上げたまま二回瞬きをして、視界を変える。青しくない世界で物の形が線を持つ。頭上の電灯から伸びる紐の先についた、小さな飾りさえも。それは、星の形をしていた。昼間見た時には確かに、金色をしていた気がする。この部屋の中でそれだけが少し違う。何が違うのかは解らないけれど。

ベッドの反対の壁にある大きな机と本棚を見て、そこに並ぶ物語や専門書の背表紙を眺め、半開きのクローゼットに目を凝らして、それから、フェイトは自分の正面を見た。

はやての顔がそこにはあった。

目を瞑って、穏やかな寝息を零している。寝るときは横に並んだだけなのに、今はその両腕が自分にまわっていて、フェイトははやての胸の中に抱きすくめられていた。宵闇のせいで、はやての茶髪は表面に微かに光沢が流れるだけの黒に見える。色が濃いから硬そうに見えて、でも触ると不思議と柔らかい髪。

フェイトははやての胸に顔を押し付けてまるくなると、幾度か息を繰り返した。はやての匂い。寝てるときはのぼやけた匂いでも良いから、ちゃんと覚えておこうと

思う。自分よりも少し大きくて、自分を包んでくれる腕をちゃんと大切な物として胸にしまっておこうと思う。

フェイトはそうして、はやての腕から抜け出た。起こさないようにそっと、自分の服を挿んでいる指を解いて、腕を毛布の中にしまう。はやては目を瞑ったまま、静かに眠っていた。

ベッドを降りて、半開きのクローゼットをもう少し開ける。畳まれたはやての服が並ぶ中、目を凝らして自分がある日、着ていた服を探す。はやては真ん中の段にしまったと言っていた。そしてそれは、言葉通りに見つかった。

服を広げて、フェイトは止まった。丁寧に洗ってくれたみたいで、少しお腹のあたりに薄く色がついているだけで汚れは綺麗に落ちている。空いていた筈の穴も、裂けていた部分も繕ってくれていた。

でも小さすぎて、今の自分には着られない。

フェイトは服を握り締めた。何処かで分っていたことだった。でも、わかりたくないことだった。

フェイトはその服を抱えて、ベッドサイドを振り返る。そこには寝る前にははやてが用意してくれた、明日着る筈の服が置いてある。一步でも、はやての方に戻りたくなかった。でも、勝手に他の服を持って着て行く訳にもいかないし、パジャマで帰る訳にもいかないから、フェイトは覚悟を決めた。唇を引き結び、ベッドサイドへと足を立てないように近づく。はやての顔を見ないように

して。

はやてが用意してくれた服は、お日様の匂いがまだ残っていた。でもそれ以上に、はやての匂いがした。フェイトは踵を返し部屋の反対の隅に戻ると、服をさっと着替える。何か言って行くべきかもしれない、せめて書き置きでもしていくべきかもしれない。そんなことがずっと、頭の中でぐるぐる回っていた。でもどうしていいのかは分らなかった。だから、せめてパジャマは畳んでおいた。

部屋のドアに手を掛ける。片手には血の染みが落ち切らなかった服を抱えて、掌に微かに冷たいドアノブを掴む。

静かだった、肌が溶けそうな程に。部屋の中も外も寝静まって、月さえなにもしやべらない。背を向けてしまえば、目に見えるのは木製のドアとそこに落ちる自分の影だけだ。人の年齢なら13になる、自分の影。

その影に、三角の耳と尻尾が映っているのに気付いて、フェイトは薄らと口を綻ばせた。そうして、音も無く魔法を編む。金の光が手の中で砂粒のように散り、木のドアを星空に変えて消える。それと共に、猫の耳も尻尾も消えて、ただの人の子供のようになつた。

フェイトはドアノブを握る手に力を込める。

「挨拶もしないで行っちゃうなんて、つれないんとちゃう？」

振り返るとすぐ後ろで、はやてが穏やかに佇んでいた。

「あ、はやて・・・」

いつの間に起きたのだろう、いつの間に立ち上がって自分の後ろに来たのだろう、フェイトの脳裏をそんな疑問が駆け巡る。けれど、そんなことをいつまでも考えていることは出来なかった。

「どうして、って顔しとるよ。」

私起床きたのに驚いた？」

はやてはそう問い掛けると、手を伸ばしてフェイトの頭を撫でた。気付いていても直らない癖で、フェイトの左目が閉じる。はやての指先が、フェイトの髪を梳いた。「耳と、それに尻尾も、しまつたんやね。」

フェイトは何故だか急に自分の背が凄く縮んでしまったような気になって、肩を小さくした。

「マスターのところ、帰るん？」

はやての声は、本当にやさしかった。人がよく出す怒る前の猫まで声とは違う。はやての腕と一緒に。包み込んでくれるみたいで、そういう音色。

「うん、帰っておいでって、言うのが・・・聞こえたんだ。」

怒られるかな、と思つたけれど、フェイトは正直に答えていた。マスターが言うままに、こんなにも優しくしてくれた人に、ろくにお礼も言わないで出ようなんて、なんて冷たいんだろうと自分でも思う。

「そっか、念話通じたんやね。」

けれどはやては嬉しそうに目を細めてくれた。

「・・・止めないの？」

最初の日、帰ると言ったら抱きしめて力づくで止めて来たはやてのことを、今でも覚えていた。あんまり悲しそうに、そんな風に笑わないでと耳元で呟いたはやての声を覚えていた。

はやてはフェイトの頬を撫でた。

「フェイトちゃんは、マスターのこと好きなんやね。」

突然そう言われて、フェイトは驚いて、頬を撫でるはやての手を見た。柔らかくて温かいその掌から伝って、ゆっくりとはやてを見上げる。

「うん。」

月光の破片がはやての背後、部屋の真ん中に散らばっていた。僅かな逆光に、はやての顔は少し暗い。でも眼差しはいつもと変わらないから、フェイトは黙って続くはやての言葉を待った。

「フェイトちゃんがうちに来た日、覚えとる？」

いっぱい怪我してたから、私、本当は夜の間中ずっと心配してたんですよ。」

はやての親指が、ほお骨のあたり目の下を撫でた。思わず片目を瞑ると、はやてが頬を解いた。

「マスターに頼まれたお仕事をやってる時に怪我しちゃったん？」

声音も調子もいつもよりずっとなだらかだったけれど、何か食い入るようなものがあって、答えないで済ま

せることは出来なかった。フェイトは唇を結ぶと、微かに頷く。

「欲しいものがあるから取って来て、って言われたんだ。でも、うまくいかなかった。」

そう、と答えるはやての囁きは幽かだった。多分、悪いことだと思う、そう昼間はやてに教えたことを急い出した。それと同時に、はやてが時空管理局という警察みたいな仕事をしていて、ちよつと偉い人だということも。

「きつと、訳があるんだよ、はやて。」

だから、

はやての服の裾を思わず掴んだ。はやてはフェイトの頬を撫でていた手で、その手を包む。フェイトの指を解かせ手を繋ぐ。

「それでもフェイトちゃんは、何かしてあげたかったんやろ？」

はやての手は温かかった。胸のあたりにまで持ち上げられた繋いだ手を、フェイトは少し握り返した。

「いつも、悲しそうなんだ。」

だから笑って欲しかった。

私が頑張って笑ってくれるなら、なんでもしてあげたかった。」

フェイトは視線を下に落としていた。フローリングの上立つはやての裸足が、自分の方を向いている。はやての影が自分の方に伸びて、フェイトを覆っていた。

「最期まで仕えることが私達の契約だから。

だから、何に代えても笑顔にしてあげたかったんだ。」
指が絡む。はやての左手がフェイトの指の間に滑り込んで確かに手を結んだ。

「じゃあ、これからもずっと、そうするん？」

はやてはただ尋ねた。責める気はなかった。フェイトが口を噤む沈黙の間も、ひたすら答えだけを待っていた。何を答えてももう自分の気持ちは変わらないから。だから、フェイトの答えを待っていた。

手を合わせ、夜の暗い部屋の中に二人で、どれだけ息を吞んでいただろう。はやての目ですら闇に慣れ、ゆるやかに部屋の形が現れ出す。押し黙るフェイトの表情もそう。

「もう、同じようには・・・しないつもりなんだ。」

擦れた声が静寂を振るわせた。

「好きな人が悪いことするなら、止めてあげたいって、はやてが言ったよね。」

私も、そう思うんだ。

このままじゃきつと、笑ってくれないんじゃないか、って。」

フェイトがはやてを見上げた。

「ありがとう、はやて。」

私を拾ってくれたのがはやてでよかった、って思うよ。」

薔が綻び、花へと姿を変えるその刹那のような、そんな

な笑みをフェイトは広げた。

そして、一步はやてに近づいて、背伸びをして、はやてにキスをする。触れるだけの信愛の口づけ。

「私、はやてのこと世界で二番目に好きだよ。」
フェイトは繋いでいた手を解いた。

背を向けてドアを引く。それを、はやては手をついて止めた。

「はやて。」

身長差のためか、覆い被さられたフェイトが身を竦めてはやてを振り仰いだ。その姿に怯えが滲んでいるように、はやては安心させるように風いだ調子で紡ぐ。

「私も、ちよつとだけついてってええかな。」

マスターさんとちよつと話したいことがあるんよ。」

○

足元に真つ黒な夜空がある。空のただ中で真つ逆さまになって、足の間に星空を見下ろす。磨かれた金貨を散りばめたような星々は掴めそうな程に硬く光っていた。どんなに夜の中に手を浸しても、指先すら触れられないだろうけど。遙か距離を隔てて、はやての今にやって来た過去の光。人は過去にしか生きられない。未来を見る

ことも聞くことも出来ない。いかなる光も音も、すべて受け取る時には過去のものだからだ。

けれど、未来を作ることには出来るだろう。自らが動くとは、自らが何かを発するとはそういうことだ。

「ミッドチルダと違って、こっちはまだ寒いんだ。

はやて大丈夫？」

フェイトが夜空を駆け下りて行く。この一ヶ月程の普段とは違った表情と声音をしていた。金色の髪が夜なのに艶やかに煌めく。星の金貨の一粒みたいに。

「ちよお寒いけど、なんとかなると思うわ。」

はやては身を翻すと、フェイトの少し後ろを舞う。市街地を飛んでいるのに、飛行許可を取らなくてよかつたのかな、なんてどうでも良いことを思った。

足元に街の灯が広がっている。広々とした野の一角、川にほど近い地方都市。朧に見える街並は何もかもがはやての知っているものと違う。石造りで瀟洒な時代を感じる古い街並が、橙色をした街灯をいくつも点していた。「あの公園に降りるからね。」

フェイトが街を貫く石畳の通りから、一步入った所にある小さな広場を指した。横に広く大きな建物数棟に囲まれたそこにはいくつかのベンチと、中央に石像が一つ立っているのが見えた。

「ん、了解やで。」

はやてが答えるのを聞くや否や、フェイトは飛び降りていってしまった。はやては口を引き結んで、頬を切る

冷たい風を吸い込んだ。頭上に夜空を仰げば、星は一層遠い。

：

それはこの世界の宗教の神なのだろうか。そう広くはない広場の中央に立つ女性の石像は頭に黄金の冠を頂いていた。星を象ったような、植物を象徴したような冠。

「ここで待ち合わせなん？」

はやては尋ねながら、フェイトの手を握った。

「うん、そうだよ。」

答えるフェイトはしきりに周囲を見渡していた。人間の耳と目で、彼女は求める人の姿を探す。

「一人で帰って来て、って言われてたから、まだはやてのこと全然話してないんだ。

だから、ちゃんと紹介するまでちよつと待っててね。」
大して広くもない広場は周囲三方を建物に囲まれ、空いた一方には通りが面していた。通りと言っても、車が二台すれ違うのが関の山であるう石畳の道は、人が歩く為のものだとわかる。大きな石で組まれた建造物の一階は何処も電灯のついていないショウウインドウが並んでいて、二階から上はアパートになっているようだった。だが何処も、街灯の橙色が角をテラスばかりで、街に人影は見当たらない。
「ああ、わかつとるって。」

真面目さんやなあ、フェイトちゃんは。」

はやては顔き返しながら、何処に居るとも知れぬ契約者を待つ。

彼女をまるで物のように扱って、フェイトがそれと気付かないうちに捨ててしまおうとした契約者を。

「なあ、フェイトちゃん。」

呼びかけると、フェイトが手を握り返した。

「なに、はやて。」

マスターとお話するときは二人で、つていうのはちゃんと覚えてるよ。」

フェイトがはやてを振り向いた。すぐ隣に立っているフェイトの顔は、はやてより5センチだけ下にある。その頬は丁度ははやての肩ぐらいの高さだった。

「フェイトちゃんは、うちの子になるつもりあらへんかな？」

フェイトは目を丸くして、まじまじとははやての顔を覗き込んだ。

「こんな時に言うてごめんな。」

ずつと、言おう言おう思ってたんやけど、なかなか切り出せなくて。」

そう紡ぎながら、はやては腰を少し屈めて、フェイトを正面から見つめた。フェイトは戸惑っているようで、でもはやてのことをその芯のある目で見つめ返す。出会った頃と似ている、相手を透かしみるような透明な眼差しだ。

「なんで、じゃあ今言ったの？」

はやては静かに、唇を引き結んだ。

ずつと考えていることがあった。家の全員がわかっている、あえて誰も、一言も触れなかったこと。この子を見つけ、名前を知ってからずつと、心の奥底で最も危惧していたこと。捨てられているのも同然だったとか、虐待じみた扱いだったとか、それらが全て霞んでしまいうな、最も怖い可能性。

ずつとこの子にだけは隠し続けているその一番怖い可能性を、はやてには告げることが出来なかった。

「フェイトちゃんのこと好きで、心配やから。」

せやから、今まで言えなかつたけど、言わないままでお別れ出来へんから、言うたの。」

想いだけをはやては口にする。大切なものは何も告げないまま、ひたすら自分の心だけを。それだけが、フェイトに教えてやれることだった。

フェイトが僅かに目を伏せた。

「はやて、私は——。」

石像の裏で小石を蹴る微かな音がした。

フェイトが弾かれたように振り返り横顔を輝かせ、はやてがそちらを睥睨した。

石像の横に、50か60かも判らない老けた男が立っていた。夢遊病者のような臃な足取りにも、服が肩からずり落ちそうなまでに痩せ細った体軀にも、白髪が混じ

った頭髮にも、落窪んだ眼窩にも、何処か病気の影が漂っているような男だった。背だけが妙に高く、肩を左右に揺らしながら数歩、こちらに歩み寄る。

「マスター！」

フェイトがはやての手を解いて、彼の方に駆け寄った。彼は乾いた唇を解いて、皺の刻まれた目元を細くして見せる。

「おかえり、フェイト。」

噎れた喉。はやては彼が笑ったのだと気付くのに数秒を要した。あまりに枯れ木の様で、あまりに疲れ切った風姿で、あまりに描いていたものと目にするものが違つて声を吞む。

「道中、無事だったかい？」

腰を屈め、フェイトと同じ目線の高さには彼は自分の背丈を合わせた。奇妙な取り合わせだった。煌めくばかりの金の長い髪を纏つて、白い肌で、輝くような赤い瞳に喜色を浮かべている幼い女の子と、まるでこの世の影それも街中で一番薄暗い所に年中溜まっているような類いの影を集めたかのような陰気で老齡な男が向かい合っている。少女の眼差しを一身に受けながら。

「うん、元気になってから出て来たから。」

それに、その・・・、助けてくれた人が居るって言ったよね、その人も一緒に来てくれたんだ。」

彼はそれを聞くと、フェイトの頭を撫でてから背筋を正して立ち上がった。灰色の短髪を冷たい風が吹き晒す。

彼の細い目蓋がはやてを映して微かに見開かれるのを、確かにはやては見た。

「はやて、つて言うんだ。」

凄く優しいんだよ。」

フェイトが彼の足に掴まりながら嬉々としてはやてを紹介する。彼の背の高さと相まって、フェイトの印象は今までよりもずっと幼い。はやてはそんなフェイトの仕草を目に納めながら、彼にじつと注意を払っていた。彼は表情の変化に乏しい痩せこけた頬を引き攣らせ、おおよそ笑みのような物を浮かべる。

「それは、危ない所を・・・、本当にありがとうございませう。あなたに助けて頂けて、本当に幸運です。」

胸の淵が嫌な音を立てるのを、はやては聞いた。彼はその骸骨のような顔でよく浮かべられたものだと感心したくなる程に柔和に表情を崩していたのにも関わらず、はやての体側で掌が握り拳に変わる。

「私はただ、酷い怪我をして倒れていたフェイトちゃんを放っておけなかったんです。ここまでついて来たのも、私の心配性ですから。」

この男が、この黒猫の契約者。

はやてが愛想笑いを返すと、骨に皮を貼付けただけのような男は唇を捲つて謝意を示す笑みを見せる。

「いえ、送ってもらえてうれいしです。」

こうしてあなたに会つて、お礼を言うことも出来ました。」

はやてには彼に、確かめねばならないことがある。恐らく、何故彼がこの黒猫をフェイトという使い魔にし、この容姿で、この魔力変換資質を持ち、そして何故、道具のように扱われていたのか。その答えを与える筈の、一つの事実の有無を確かめねばならない。

「私はご飯を食べさせるくらいのことしかしてませんから。」

フェイトにとって、一番酷いことを、確かめなくてはならない。

はやては穏やかな謙遜を威圧的な態度で吐いた。彼は僅かに首を傾げ罫入った目元を細め、こう言った。

「ありがとうございます、八神さん。」

それは、魔法の一言だった。

はやてに全てのことを理解させるに足る、たった一言。「お話ししたいことがあるんですけど、時間ええですかね？」

押し殺した声ではやてはそう呟くように言った。自分でも驚く程に低い声で、フェイトが彼の影で少し縮こまった。だから、はやてはフェイトにほんの少しだけ笑い掛けてみせる。自分でも眼差しに滲んでしまっているであろう怒りが隠し切れていないことには気付いていたけれど。

「フェイトちゃん。来る前に約束したやんな。」

二人でお話しさせて、って。」

フェイトははやてのことを、はやてとしか説明していないのに、彼は八神さんと呼んだ。それが意味するのは、はやてを元から知っていたということだ。そして、はやてを知っているということは、『彼女』のことを知っているということだ。

そして、『彼女』のことを知っていて、フェイトという使い魔を作ったということはすなわち、

「八神さん、あなたがこの子を拾ってくれたのは、本当に僕にとっては幸運なんです。」

フェイトは彼を見上げていた。その小さな手はまだ、彼の服の裾を掴んでいる。彼はその小さな頭を撫でる。

はやてはその様に、あからさまに相貌を崩した。フェイトが彼をどれだけ好いても構わない。彼に触るなと怒鳴りつけたかった。そんな人間をこれ以上慕う必要なんて無い。

「フェイトちゃん、お願いやから、ちよつとどつか行つていて。な？」

はやては平静さの最期の一滴を振り絞った。心臓が肋骨を叩いて暴れて、呼吸すら疎かにしてしまっただけだ。フェイトは不安げに眉を寄せてはやてを見ていた。

「で、でも・・・はやて、どうかしたんだよね？」

なんだか顔怖いよ・・・」
彼の影から歩み出て来て、はやての方に近づいてくる。はやてはどうにか、大丈夫そうな顔をしようとした。どだけ脆く罫の入ったものでもいいから、この場から早

く、フェイトを遠ざけたかった。

「大丈夫やから、ほんまに、なんもあらへんから。

さつき約束したやろ？」

マスターさんと一緒に、二人で話をさせてくれる、つて。」

フェイトがじつと、はやての目を見つめた。吸い込まれそうな眼差しが、よく似ているとはやてでさえ思う。たった一人のことを、ずつと思い続ける人つていうのは、みんなこんな目をするのだろうか、とも。だからこそ、彼女を守りたかった。大切に想っている人を信じている、それがもう事実破壊された物だとしても、彼女の眼差しだけは守つてやりたかった。

だからはやては、静かに笑みを口に引き結ぶ。安心させるように頷いて。そして、

その笑顔を叩き崩す笑い声が響いた。

「それは、フェイトを心配してくれているんですか？

それとも、」
錆び付いた声だった。彼は骨張った手で口を覆い、笑いを落としていた。妙に響くがらんとした声が、夜の広場に響き渡る。その音に打たれてフェイトは、はやてと彼の丁度真ん中の所で立ち止まった。

「言うな！！」

はやては怒鳴った。脳内に反響し続ける、次に彼が言うであろう言葉を叩き壊そうとした。まだこの夜の中に顕現してもいない言葉を破壊したかった。

でも出来なかった。

彼は楽しそうに告げる。

「それとも、フェイト・テスタロッサさんを心配しているんですか？」

その言葉が、はやてとそして、フェイトの耳を撃った。

「え・・テス・・？ だれのこと？」

フェイトが驚いて、彼とはやてのことを交互に見た。

「八神さんの友達、そうでしょう？」

彼は痩せた肩を竦めた。

はやては黙って、立ち続けて、彼を睨む。

「真正正銘、人間のフェイトさん。

最も、女性の腹から生まれた訳ではないそうですけれど。」

彼は溜め息でも吐くよう言った。

はやては自らの顔面が歪んで行くのに気付きながら、握り拳の中で爪を皮膚に突き立てる。

「人間の・・フェイトさん？」

同じ名前の人が、はやての友達に居るの？」

フェイトが不思議そうにはやての顔を覗き込んだ。まだ、フェイトは何も知らない。これだけの会話では何も理解出来ない。だからはやては無理矢理穏やかな声を絞り出した。これだけで納得して、フェイトがこれからのことを聞かないで済むようにと。強引に笑みに塗り替え

た為に、顔が引き攣つて今にも頬に亀裂が入ってしまひ
そうだった。

「そう、同じ名前の人がおるんよ。」

会いたいんなら、そのうち連れて来てあげるから、ち
よつと二人にしてくれへんかな？

私、どうしても話したいことがあるんよ。」

はやてはフェイトの目を、真つ直ぐに見つめた。フェ
イトは優しい子だ。真剣に言えば必ずわかつて、それを
汲んでくれるから。

「そんなにその子はフェイト・テスタロッサさんに似て
いますか？

ずいぶん、悲しそうな顔をしていますよ、八神さん。」
骸骨のような男が頬に僅かに残つた肉を引き攣らせ
て笑つた。

「似てるの？」

フェイトが首を傾げる。はやては彼を睨みつけた。目
線で人を吹き飛ばせるのなら吹き飛ばしてやりたかつ
た。彼をこの場から、吹き散らしてやりたい。

「それ以上言うんやない。」

あんたはあんだけ傷ついても、こんなにも慕つてくれ
ているフェイトちゃんに、何にも思わへんのか。

これ以上傷つけてなんになる！

それに、このフェイトちゃんと、フェイトちゃんも、
どっちもあんだなんかにバカにされる筋合ひは無
い！！！」

叩き付けた怒声が地面で跳ねる。目の前が赤くなる錯
覚すらはやては覚えていた。声でこの男を打倒出来るな
らば、喉が潰れるまで絶叫を浴びせ続けてやつてもいい。
だが彼は、何も聞こえていない風に、まるで先程と同
じ顔で言つた。

「僕の復讐になりますよ。」

フェイトの唇が音も無く、ふくしゅう、と象つた。

∴

「え・・・？」

フェイトが立ち尽くした。広場の真ん中で、はやてと
彼の間で。金色の髪が夜風に吹き散る。まだ華奢で小さ
な背が微かに揺れた。街灯はフェイトを照らすには遠く、
足元には影も出来ない。遠い星明かりだけが仄青く、フ
ェイトの姿を彩つていた。

彼はそんなフェイトの様子など、気にしてもいないで
明朗な表情をはやてに向けていた。

「よく出来ているでしょう、僕の人形も。」

もつともわかつていらつしやる通り、人間のクローン
ではなくてただの猫の使い魔ですけれど。

でも、そんな劣化コピーの方がフェイトさんらしくて
良いとも思っているんですけどね。」

ぶつぶつと体中で沸き起こる怒りの音をはやては聞

いた。拳が潰れてしまいそうなくらいに力を込めて手を握り締める。血管さえ吹き飛んで消えてしまいそうな気がした。もう何処も、怒りの為に自分の言うことを聞かなかった。

「だれ、が・・・劣化コピーやっつて？」

彼は、フェイト・テスタロッサを知っていて、このフェイトという使い魔を作った。

フェイトがクローンで、人の記憶を刻み込まれて生まれて、でも自分を生み出した筈の母に贖物だと、要らないと、ただのお慰み人形だったと言い捨てられたことを、それでも伸ばした手を掴んでもらうことが出来ずに、母を永遠に失ったと知っていて、このフェイトという使い魔を作った。

名前も同じ、顔も同じ、魔力変換資質も同じ。

そして、誰かを象って作った模倣という事も同じに、決してもとの通りでないことも同じに、フェイトという子を作るといふことはすなわち、

フェイトに対する侮辱だ。

「ふざけんな！」

あんたに、フェイトちゃんの何がわかる！ バカにするなあっ！

逆った咆哮に、フェイトが肩を跳ねさせた。だがその奥で、彼は薄ら笑いを浮かべている。その顔を塗り潰してやりたかった。もう元の形などわからない程に。

復讐などと彼が口にするものの所以などはやては知

らない。もはや知りたくもなかった。例えどんな理由があるうと、彼に同情する気など残ってはいない。フェイトに似せて作った子を、自分を慕っている気持ちを利用して、同じように道具みたいに使って傷つけてみせることで、自分の憂さを晴らそう等という人間を許してやるほど寛大になることは出来ない。

そして、フェイトをバカにするために、このフェイトの生き方も何もかも歪めたことが許せない。

唇を噛むと、端がぶつと音を立てて切れた。

「ねえ、どういふことなの？」

私にも、わかるように教えてよ。」

フェイトがはやてを見上げていた。何も知らない目には今、不安が揺れている。フェイトを見つめ返し、はやては抑えた調子で答える。

「フェイトちゃんは聞かなくてええ。

私が、ちゃんとマスターさんと話をつけるから。」

はやてとフェイトの視線が正面からぶつかった。悩むように、困ったようにフェイトが顔を歪め、俯け。そして、もう一度、はやてを見上げた。暗い夜の中でも鮮明に。

透き通った硝子玉の瞳が、はやてをそこに映していた。まるで本当に石英が嵌っているかのような眼差しで。

フェイトはゆっくりと彼に向き直った。冷静な横顔をはやてに見せ、覚めた声で紡ぐフェイトはもう、

「私、聞くよ。」

だって私、マスターのこと好きだから。」

はやてを振り返らなかつた。たった一人の、最も信頼している相手に向かって立ち、寂としたまま彼を見上げている。

「フェイトちゃん。」

はやては止めたかつた。フェイトの耳を塞ぎたかつた。だって、自分がただ、誰かへの復讐そのものだったなんて聞かされて、傷つかない人はいない。ましてそれが、最も慕っている人なら尚更。

「ふくしゆうって、悪いことだよな。」

私、マスターのこと好きだから、悪いことをしないようにしてあげたいんだ。

はやてが言ってくれたみたいに。」

でも、そう穏やかに告げる背ははやてには遠くて、遠すぎて届かない。金髪が背中を流れて、微かに光を放っているようにみえてそれでも、はやてには近づけない。はやてにはわからない。

どうしてそんなに真っ直ぐに、例え自分がどんな扱いを受けていようと、大切に想っている人に向かつて行けるのか。自分を養ってくれている親のような存在だから？ 自分を作り出した親のような存在だから？

「フェイトちゃん。」

それとも、歪でも親そのものと思っているから？

はやてにはわからない。

立ち向かおうとする彼女を止める言葉が、わからない。

そして、幾ら鞭で叩かれて人形と罵られても、まだ母さんとあの人を呼ぶ『彼女』の気持ちが変わらない。

彼は憔悴し切った顔を歪に変形させ、空洞のような目にはやてとフェイトを嵌め込んでいた。

はやては彼を睨めつける。彼の劇場が始まる。フェイトを傷つけるだけの、独りよがりな復讐の幕だ。

「あんたはこれで満足なんか？

私がフェイトちゃんを拾わへんかつたら、誰もこのことを知る人なんておらへんかつたんや。

しかも、私が会ったのやって、ただの偶然やろう？

独りよがりの復讐やない。自己満足じみてる。」

突き刺すように、はやては言葉を彼に投げつける。骨と皮ばかりの手で彼は薄い自分の頭皮に爪を立てる。白髪 of 混じった短い髪が千切れるかの様に潰れた。

「ええ、わかつてます、でもそれでいいんです。

そもそも、自己満足でもなく意味のある復讐なんて、そうあるものではないでしょう。

復讐なんて無価値などと言われるくらいですからね。」

「じゃ、じゃあ！」

フェイトが不意に声を上げた。ぎゅっと胸の前で手を握って、子供らしい仕草で背伸びをして彼に訴えかける。

「意味が無いんなら、やめようよ！」

私、マスターに悪いこととして欲しくないよ。」

それはできないんだよ、と音も無く彼の唇が動いていた。顔を半ば覆った手の下で、足元を眇め見ながらも何処か遠くをその落窪んだ目で眺めて。

「じゃあ、さいごに、話してあげるよ。」

それで僕の復讐は終わるから。」

フェイトが頷いた。

「うん。」

風が少し、出て来始めていた。冷たい風が耳を切り、頬に当たって服を煽る。他に誰も居ない市街の広場で、点々と立つ三人の服が翻る音が耳を打つ。街灯だけが煌煌と、彼を背中から照らしていた。光の中から見れば、星明かりも霞んでしまうだろうに。

「フェイト・テスタロツサさんという人はね、死んだ女の子の記憶を頭に植え付けて作られた、その子のクローンなんだ。」

死んだ女の子のお母さんが、その子を取り戻したくて、作ったんだよ。」

フェイトの幼い顔が目を真ん丸に広げて、はやてに真偽を問うた。はやては目を逸らす。それを肯定だとフェイトが理解すると知っていて、それでも自らの口では答えられなかった。それを見て、フェイトが幼い頃のフェイトと全く同じ顔で呟く。

「そ、そうなんだ・・・。」

「なんか・・・可哀想だね。」

あまりに皮肉な光景だった。はやてにはもはや、これの何が復讐なのかわからない。もうやめて欲しかった。話に聞いた『彼女』の昔を、目の前でしかもこんな歪な形で再現するのは終わりにして欲しい。やめてほしい。

「でも、やっぱりフェイトさんは死んじゃった子とは同じにはならなかったんだ。」

どんなに頑張つて似せて作つてみたつもりでも、どんなにその子の記憶をあげてみても、その子にはなれなかったんだよ。

ただの、コピーに過ぎないから。」

なんでこんなことをされなければならぬのだろう。フェイトは自分がなんなのか、どう生きて行くべきなのかよく考えていた。自分が誰なのか、自分がどうして生きていていいのか、自分が母を苛んだことを、自分が母を助けられなかったことを、自分はアリシアが死ななければ生まれなかったであろうことを、ずっと考え続けていることを知っていた。

それでも、いくら悩んで迷っても、人と繋がりに生きて行こうとする彼女が好きだった。

それでも、お母さんのことが好きで、アリシアを姉さと呼ぶ彼女が好きだった。

苦しんでも前に進んで行く、彼女の強さが好きだった。何もかも諦められないでいるような、何もかも好きで

いるような、彼女の優しさが好きだった。

「可哀想だろう？」

それなのにどうして、こんな光景を見せつけられなければならぬのだろう。

全く彼女の与り知らぬ所とはいえ、こんな光景が作り出されなければならぬのだろう。

「・・・うん。
だって、・・・やっぱり、その人にはなれるわけがないに、可哀想だよ。」

どうして、フェイトがフェイトのことを可哀想だなんて言うのを、聞かなければならぬのだろう。

同じ顔で、同じ声で、同じ口調で、同じ目で、全く違う生き物だった彼女がどうして、

「フェイト、君はね、わざとフェイトさんに似せてみたんだよ。」

フェイトを蔑む為だけに利用されなければならないのだろう。

「どう、して？」

フェイトの背が、途方に暮れたように絶望に歪んだのを、はやては見ていた。

「どうして？」

と、マスターが鼻で引つ掛けるように笑った。フェイト

が覚えている、いつもの笑い方とは全然違った。いつもの何処か悲しそうな、寂しそうな目で自分を見つめて零す笑い方と全然違う。怖い顔で、見たことの無い顔で、でも、本当に楽しそうな顔で、

「プレシアさんのマネをして、本当に可哀想だね、って言ってやるためだよ。ただそれだけ。」

笑った。

「君は、ただそのお母さんとフェイトさんを哀れむ為だけに作った、人形なんだ。」

鈍い音を立てて、フェイトの膝が砕けた。

石畳に足を打ち付けて、フェイトは呆然と最も慕う人を見上げる。遠すぎる影だった。嘘だと思いたかった。だって、そうでなければ、フェイトさんを可哀想だと言った自分も、『可哀想』になってしまふ。だから、嘘だと思いたかった。

でも、ほんの10歩程度の距離が果てしなく遠い。街灯が逆光になっていいるせいか、妙にマスターの姿も景色も歪んで渾然一体となって見えた。

はやては声をかけることも出来ないまま、フェイトの隣に寄り添って立った。

あまりに深く傷つくであろうことをわかっていた。でも彼女が聞くというのを止めなかった、止められなかった。そして今も、彼女にかけてやる言葉が見つからないまま、はやては彼に向かい立つ。

「あなたの復讐ってホント無意味。

まして、ここに居合わせるのにはフェイトちゃんやなくて、私やっていうのに。」

はやてまで泣いてしまったかった。フェイトが両眼に溜める雫の様に、何もかも溢れさせてしまったかった。でももう誰のことを、何のことを悲しんだらいいのかわからない。

「僕が最も復讐したかったのは、プレシアなんです。

でも、彼女はもう虚数空間の彼方に消えてしまっている。だから、自分の身の丈に合った愚かな方法で構わなかったんだ。」

諦めた姿で、彼は溜め息としてその言葉を放った。

はやては微かに首を振った。

「プレシアさんて・・フェイトちゃんのお母さんになんで。」

理由なんて本当はこの際どうでもよくて、終わりにしてしまいたくて、はやては疲れたままで問う。呆然と跪くフェイトをもう見ていたくなかった。彼が皮肉げに口を引き攣らせた。

「プレシアの娘が死んだ暴走事故で、僕は妻も子も失ったんですよ。

プレシア・テスタロツサが安全管理責任者を務めていて、そのくせ暴走させて半径数キロの生き物全てを皆殺しにしたあの事故で。」

僕の妻子も死んだんです。」

呼吸が止まった。一瞬きり。

「え・・・。」

あの時の事故の記録を、はやても多少なりと知っている。魔導実験の末に起こった事故。駆動炉の暴走時に漏れたエネルギーが酸素と反応し、内部に飲み込まれたもの全てを窒息死させた事故。その暴走時のエネルギーは半径数キロに渡って広がったと記録されている。

人だけでなく、あたりを飛ぶ鳥も、犬も猫も植物さえ窒息死させたその事故は、被害の程と共にこう記述されている。すなわち、「プレシア・テスタロツサが違法手段・違法エネルギーを用い、安全確認よりもプロジェクト達成を優先させた」と。

「で、でも・・そんな・ん。」

乾燥して絡み付く舌を喉から剥がし、はやては声を振り絞る。フェイトちゃんが悪いわけじゃないと、その言葉が喉で詰まって出て来ない。顔を顰めるはやてを見ながら、彼は目を細めた。

「ええ、僕も当時は、管理体制を一人に任せてしまった企業側の責任だとも考えていました。

プレシアも娘を失ったと聞いていましたからね。」

それから僕はその会社を辞め、技術者として管理局に勤務するようになったんです。」

はやては沈黙して、彼の話を聞いていた。管理局に務め始めて何が起こったのか、もう言わずともわかってい

たけれど。管理局で彼は会ったんだ。彼女に。

「フェイト・テスタロッサに会ったのはそこででした。8年前。

ホント驚いたんです。

だって、あの事故で亡くなった筈のプレシアの娘と同じ顔で同じ姓を名乗る子が、12歳くらいに成長して目の前に立つてるんですよ？」

呆れなのか憤りなのか、彼の口調から滲むものがいずれだろうか。痩せ細って病的な印象しか与えなかった老いた男が、急に妙な質感を持ち始めたように思えて、はやては視線を落とす。隣ではフェイトが顔を俯けていた。「それから、すぐに調べたんです。

彼女のことをそして、PT事件のことを。」

PT事件と現在では呼ばれるようになったその事件は、管理局内では有名な事件だろう。一人の魔導師がロストロギアの力を借りたといえ次元を割ったことは、明らかな脅威であるからだ。大規模な次元断層を起こし、近隣の世界すら巻き込む恐れのある重犯罪の刑罰は重く、一般には懲役数百年に及ぶこともある。PT事件はプレシアが虚数空間に消えたため主犯は不在であり、その争点は彼女の指示を受けて行動していたフェイトだった。フェイトは自分の出生のことも知らず、母の目的も知らず、また肉体的苦痛を伴う虐待を受けており、子供もであったことから、半年の裁判の末に保護観察処分が言い渡された。

だから、彼がフェイトのこともPT事件を知ることが出来たのも、管理局に勤めていたのなら不思議は無い。

はやてですら容易に触れることの出来ない、フェイトの終わり始まりの日。次元を割ってプレシアが娘の命を求めて、時の狭間に消えた日のことを。

彼は左手で頭皮を掻きむしり、右手を眺めて口を震わせる。

「僕は何を許容出来ても、そのことだけは許せなかった。僕はなにもかも失って取り戻すことも出来ないまま生きながらえるしかないのに、僕の家族を奪った事故を起こしたプレシアだけが、そうして失った者を取り戻そうとしていることが許せなかった。」

泣き出しそうな声だった。

「僕にはその夢を追うだけの魔力さええないのに。」

金貨のように星が輝く夜空が遠い。

街の上を過って行く真つ黒の雲さえ遙か彼方だ。

はやては地面を蹴るだけで、雲に触れることが出来るだろう。だがこの男には、たとえ頭上で光を放つあの街灯にさえ触れることは出来ないのだ。見ただけで判る。彼には魔導師たりえるような魔力素養など無かった。念話さえ彼からはろくに送れないと、フェイトが言っていたのは事実だった。

「カス程にも魔力素養の無い僕を嘲るように、プレシアはひとつまみの限られた才能でもって、娘を求めて次元の狭間に消えて行ったことが、僕には許せなかった。

彼女に妻も娘も殺された僕はただ、それでも愛した妻子に恥じぬようにと・・・、そう思つて生きてきたのに。なのに・・・っ。」

彼の手が、祈るように組まれた。その拳は口に押し当てられ、歪んだ声が喉から漏れる。涙に歪んだ声が。

「僕の妻も娘も殺したあの女が・・・、ただ自分の娘を生き返らせようとしたことが、許せなかったんだ。」

ぼつ、と。

彼の左目から涙が落ちた。

フェイトが弾かれたように顔を上げた。涙を零す彼を見つめ、その砕けた足がもう一度地面を踏みしめる。フェイトが静かに、立ち上がった。はやての隣に並んで、はやての一步前に出て。彼を見つめた。

「マスター。」

フェイトの呼びかけを塗り潰し、彼は言い放った。

「だから、どんな形でも良いから、復讐をしてやりたかった。」

彼に向かい、歩き出そうとしていたフェイトの足取りが止まる。彼はフェイトを睨みつける。顔に黒く影を落としたままで。

「彼女が作ったフェイトが生きることが許せなかった。」

彼女が一抹でも幸福をこの世に残して行つたことが許せなかった。

だが僕には、彼女に似て高い魔力素養を持つ彼女をど

うこうするなど出来る筈が無かった。

カス程の才しかない自分には嘔み付くことさえ出来ない。」

思つてもみない、告白だった。

誰が彼の感情を、自分勝手だと切り捨てることが出来るだろう。自分勝手な悲しみを誰かに押し付ける権利など誰にも無い、そんなお綺麗なことを言うつもりなどはやてには無かった。

「そういう、わけやったんね。」

自分の家族が吹き飛ばされて、なんて彼のその日の事を自分に置き換えて想像するのは怖かった。突然魔力光に飲み込まれて、その場に居た誰かが咄嗟に張つた結界に守られて、その後には他に何も生きていない。通りに出れば鳥も猫も犬も虫も死んでいて、道ばたと言わず折り重なつて斃れていて。

その絶望的な道の先、いつも自分を迎えてくれる家族がいる家が、ただの箱になつてしまつていたとき。

誰が、何を恨まずに居られるだろう。憎まずに居られるだろうか。

はやてには無理だ。

無理だけど、

「でも、だからつて、フェイトちゃんを傷つけていいわけない。フェイトちゃんを、侮辱していいわけにはならへん！」

彼を許す事も出来ない。

幾ら同情しても、幾ら自分だったら正気で居られないとしても、そのために、フェイト達を傷つけることが許せない。フェイトをそうやって傷つけることは許せない。

「フェイトちゃんが悪いわけやないやろ。」

ましてや、このフェイトちゃんは全く関係なかったのに、あんたが勝手に巻き込んで傷つけて、それでいいわけないやろ。ふざけんな。」

足の裏が熱い。肩が腕が戦慄くように怒りに満ちている。ぶつぶつと音を立てて血管が引き千切れるような怒りだ。彼ははやてに相対し、吐き出すように笑った。

「フェイトちゃんが悪いわけやないやんか！」

それなのに、どうしてあんたの為に傷つけられなアカんのや！！

どうして無関係だったこの子が傷つけられなきやアカんのかって、聞いてるんや！！」

ぶち当てた叫びに、殴りつける言葉に、彼は薄らと表情を崩すだけだった。肩を竦めて軽い調子を唇に乗せる。「クローンなんて僕には作る気もありませんでしたからね。誰かと違って、人体実験なんてしたくありませんでした。」

だから、使い魔にしたんです。

その子は丁度、拾ったんですよ、遺伝障害があるみたいで親猫に捨てられてたんですね。今でも左目はそれほど見えてない筈ですよ。」

「そんなこと聞いたらん！」

あんたは、あんたの為に傷ついてるこの子を、何とも思わないんか！！」

フェイトの背が小さく震えていた。華奢な後ろ姿しか、はやてからは見えない。だが、彼はフェイトの顔が今、見えている筈だった。幼いなりに必死で、まだ彼を慕っているフェイトの顔を見ている筈だった。彼は、帰って来たフェイトに笑い掛けさせたのに。なのに、褪めていた。

「その子を素体に使うまでに、何度も他の動物で試したんです。でも、僕程度の魔力素養では、使い魔一体を作るのも難しく、何度も失敗したんです。」

その度に、何体もの動物が異形のままで死にました。」彼は色褪せた顔に、そっと喜色を混ぜた。

「だから、フェイトが出来た時、まるで、」

ふ、と息を切り、彼はフェイトへと一瞥を送った。

「まるで、フェイトは死体の山から立ち上がったように思えましたよ。」

呻きを、フェイトがか細く漏らした。

「あんた、なんつうことを——！！」

「プレシアも、そうだったんでしょね。」

まして、彼女は人間のクローニングの実験を続けたんだ。どれだけの我が子の失敗作の山を築いたんでしょうね。

きつとフェイトさんなんて、死体の山から這い出して

来た、我が子の顔をした死体にしか思えなかったでしょうに。」

何かが切れた。

心の中か、頭の中か、体の中か。

自分の中で、何かが切れた。

「許さへん。」

迷っても、どれだけ悩んでも、母さんが好きなフェイトが好きだった。

どれだけ傷ついても、自分であり続けようとするフェイトが好きだった。

それを、

それを————

「死体で出来た、自分の子の顔をしたものを作るなんて、プレシアも相当狂ってたんでしょね。」

気色が悪いだけなのに。」

研ぎすまされた金属音が響いた。

はやての足元に正三角形の魔法陣が輝き、白い光の粒子が吹き上がり弾ける。

「あんたは、あんたは許さない!!!」

絶対に!!!」

手の中でシュベルトクロイツが顕現する。硬い金属の

光沢を纏い、内部で演算を開始する。事前に組んでいた魔法のパッケージが解凍される。

「八神さんも、相当な素養を持つているんですね。」

あなたが一発そのまま殴れば、僕はすぐに退場しますよ。この世から、ですけど。」

「マスター!!!」

嘲った彼に、フェイトが叫んだ。そしてフェイトは、彼を守るように立ちはだかる。はやてに向かって両腕を開いて。はやてに初めて、その顔を見せて。

「ダメだよ!」

マスターのこと怪我させるんなら、はやてのこと大っきらいになるから!」

大ッ嫌いだからね!!!」

必死で、本気でフェイトは怒鳴る。これまでの警戒していた顔とは違う。心から怒っている顔。フェイトが本気で怒っているのを、はやては初めて見た。もう一人の初めては、まだ訪れていないけど。

「怪我させる気はない。」

フェイトちゃんの返事聞いてへんのに、ごめんな。でも、もうフェイトちゃんがその人に使われているのは我慢ならへん。このまま強制的に契約を上書きする。

フェイトちゃんは、フェイトちゃんは傷つけられる為だけに、作られたんやで!?!」

「でも!!!」

フェイトが涙を浮かべて声をひっくり返らせた。金色

の光が弾ける。足元に環状魔法陣が展開され、雷光が輝く。

「それでも嫌だ！」

これからは変わって行けるように頑張れば良いんでしょ！？」

これからは悪いことじゃなくなるようにすれば良いんでしょ！？」

はやて、好きな人にならそうするって言ったじゃない！

私だってそうしたいよ！！」

金色の光の中で、フェイトが身を折り叫んだ。腹の底からの絶叫がはやてを叩く。

「フェイトちゃん、でも！」

叫び返しながら、はやてはフェイトがスフィアを展開するのを絶望的に眺めた。自分が今起動しているのは、使い魔の契約を上書きする為のルーチンだ。複雑で、はやてにとつては制御するのが難しく、ただでさえ成功させられる可能性は低いのに、スフィアで攻撃されたら全てが破壊されてしまう。今でさえ、集中が切れて制御が吹っ飛びそうなのに。

はやてには入って行ける所が無い。どうしてそんなに好きなの、どうしてそんなに慕えるの、自分を拾ってくれたから？ わからない、はやてにはフェイトが遠い。

「もういいんだ、フェイト。」

彼が、静かに告げた。

安らかな調べで。

フェイトが彼を肩越しに振り返った。

「使い魔を維持するのに、僕の魔力は少なすぎるんだ。

今も、まるで命が削れるみたいで、苦しい。

だから、」

フェイトは服越しに、首に下げたタグを握り締めた。

彼が初めてくれた、フェイトの名前が書いてあるタグ。

もう錆びて黒くなつてしまったけれど、なにより大切なそれを握り締めて、フェイトは、

「もう契約は解消する。」

彼の最後の一言を聞いた。

「お前のことなんて大嫌いだよ、フェイト。」

嘘だ。

うそだ。

うそだ。

「うそだあああああああああああああつ！！」

金色の魔法陣が弾けて消えた。星屑になつて夜風に散る。フェイトの絶叫が散る。

「フェイトちゃん！！」

はやてが吼える。魔法の起動が間に合わない。まだ7

割しか動き始めていない。だが彼が告げる。彼の足元に環状魔法陣が開く。紫の光がそこから立ち上る。淡い風のように。

「どうして！」

ねえ、いいよ、そういうつもりで作ったとか、そういうのもういいよ！

そういうのいいから、私、それでもマスターのこと好きだから！」

フェイトが駆ける、絶望的な距離を彼に向かって。

契約の解除が始まる。

フェイトの体が砂のように崩れて行く。

「フェイトちゃん！ 止まって！！！」

せめて、せめてフェイトが立ち止まってくれたらはやては魔法の起動に専念出来る。でも、フェイトは彼に向かって、駆けて行ってしまふ。後ろに金色の光の帯を引いて。魔法で作られた体が解けて行く。フェイトが金色の光の粒に変わって行く。

「フェイトちゃん！！！」

はやては不完全なまま魔法を解き放った。白い光が炸裂し、視界が真っ白に染まる。フェイトの背中がその中に包まれる。でも、フェイトの体が金の光に崩れて行くのを止められない。手から魔法が溢れて行く。

どうして？

大切に思う人は、守りたいと思う人は、いつも魔法の光の中で消えてしまう。後に、一粒の光だけを目に焼き

付けて、自分の前から居なくなってしまう。そんなのもう嫌なのに。

フェイトのことを助けたいと思ったのは、その容姿じゃない声じゃない性格じゃない、フェイトに似てるからじゃない。ただ、好きな人を想っているその生き方だったから。だから、

「フェイトちゃんが一番好きなのはマスターさんだっで判つとる！」

だけどお願い、私の手を取って！

消えないで！！！」

はやては、崩れて行くフェイトの背中に叫んだ。真っ白の光の中を駆けて行ってしまふ、遠いフェイトの背中に、何処まで飛んで行くような声で叫んだ。

「私が一番じゃなくていいから！」

いつまでも二番で良いから、お願い！

私は、フェイトちゃんに生きていて欲しいだけなの！！！」

フェイトが手を伸ばして叫んだ。

走る背中が光の中で遠く消えて行く。

「嫌だよ、一緒に、いっしょに居ようよ！！！」

フェイトの声が聞こえて、それでもはやては、自分を置き去りにする背中に向かって、声を張り上げた。

「マスター！！！」

フェイトの背が、光の中に消える。

「フエイトちゃん、私達の契約は——！！！」

「えと・・・、フェイト・テスタロッサ・ハラウンです、初めまして。」

よろしくね。」

フェイトが手を差し出した。

けれど、フェイトははやての背中に隠れて、尻尾を立てているばかりだった。

「割と人見知りらしいから、ごめんなあ。」

すぐ慣れると思うんやけど。」

はやては背中につけて付いている黒猫の頭を撫でながら、フェイトに向かって眉を下げた。

∴

昼下がりの日差しは気持ちいい。

フェイトははやての家のリビングで、日溜まりに座ってぼんやりと庭を眺めていた。

「なに、そんな庭ばっかり眺めて。」

今回の航行任務で、いつの間にかそんなに老けたん？」

お茶を淹れて来たはやてが、憎まれ口を叩いて笑う。フェイトはもう、と頬を膨らませる。

「そんなじゃないよ。」

ただ、まだちよっと時差ぼけが残ってるだけで。」

それはそうだろうなあ、と思いつながらもはやては気のない相槌をした。今回は大分遠いと所に行ったようで、

メールを送っても届くまで三日は掛かる、なんて事前に言われていたくらいだ。念話さえ通らない彼方から帰って来たのは三日前。時差ぼけが治らないのも当然だろう。「行った場所は、どんなところやったん？」

おみやげは？」

ソファにもたれかかりながら、はやてはフェイトの向かいに座る。

「今回は防疫が厳しかったからお土産はないよ。ごめんね。」

「ちえー、じゃあ向こうの話も聞かへん。」

はやては拗ねた振りをして、唇を尖らせた。小さく笑い声をあげるフェイトを横目に見ながら、自分で淹れて来たお茶を誰より早く呑む。カップは3つ。中には琥珀色の紅茶が注ぎ込まれている。この前買ったファーストフラッシュだ。

「フェイトちゃん、一緒にお茶のもーよ。」

はやてはフェイトに差し出したのとは別のカップを持ち上げて、台所の方、部屋の片隅で小さくなってこつちを窺っている黒猫を呼んだ。食器棚の陰に隠れて、黒い耳をしきりに動かしてフェイトがこちらの様子を探っている。

「んー、嫌われちゃったのかなあ。」

はやてと黒い耳を見比べて、フェイトが呟いた。はやては小声で、だいじょーぶやって、とフェイトの肩を叩く。

「ほら、クツキーもあるんやで。」

お菓子もご飯も一緒に食べた方がおいしいやろー?」
そんな食べ物でつるなんて、あからさまな……。な
んてフェイトは肩を落としたけれど。

「食べる。」

と素直な幼い声が答えて、黒猫の耳と尻尾を生やしたフ
ェイトが物陰から出て来た。はやては出て来たフェイト
に向かつて、嬉しそうに手招きする。

「よっし、ほら、おいで！」

今日は特別にはやてちゃんの膝の上貸したるでー」

尻尾を左右に大きく振り、フェイトが歩いてくる。そ
の目ははやての隣に座るフェイトのことを注意深く見
ていたけれど、敵意というよりは遠回りな好奇心のよう
にも思えた。

フェイトはソファの背を回って、遠回りしてはやての
膝の上に座る。

「素直で可愛いやろ。」

どっかのへタレさんとは大違いで。」

はやては大満足でフェイトの頭を撫でながら、三角耳
の間に顎を乗せた。

「私別に、へタレじゃないよお。」

フェイトがへタレた顔でそう漏らす。

「食べて良いんだよね、はやて。」

はやての膝の上に座ったフェイトが、耳をピンと立て
てそう尋ねた。はやては大きく頷いて、「こっちのフェ

イトちゃんの分まで食べちゃっても構へんからな。」な
んてふざけて笑った。

「いただきます。」

フェイトは行儀よく行ってから、クツキーの缶に手を
伸ばす。でも短く小さい腕は、はやてに抱き込まれた状
態だとテーブルの真ん中の方に置かれた缶まで遠い。

「好きなの食べてね。」

私が持って来た奴だから。

はやての分まで食べていいよ。」

耳を立て、フェイトがフェイトを見上げた。十三歳く
らいの幼い顔と、二十歳の同じ顔が見つめ合う。不思議
そうに丸く目を開いているフェイトと、優しく目を細め
るフェイトが居る。

「ありがとうございます。」

アーモンドの載ったバナラのクツキーを手に取り、フ
ェイトがおずおずと答えた。

「どういたしまして。」

フェイトは答えて微笑む。

はやては横から手を伸ばして、ラングドシャを一枚手
に取って食べた。

：

耳を伏せ、尻尾を抱え込んでフェイトが眠っていた。
午後の日差しを浴びて、寝息を立てて。

フェイトの膝の上で。

「さつすが子供キラーフェイトちゃん。

懐くの信じらんないくらい早くて、もう嫉妬しようがあらへんわ。」

はやてはフェイトの上で丸くなっている愛猫をうち眺めて、少し敗北感混じりにそう呟いた。状況が状況だったからかもしれないけれど、こっちは腕噛まれたり攻撃魔法打たれたりしたのに、流石にこりやないぜ、と思う。

「はやての事が好きだからだよ。」

だから、安心してるんだよ、きっと。」

フェイトは丸まっている子の背中を撫でながら、穏やかに頬を緩める。

「そんならええんやけどねえ。」

はやては気のない風に答えて、後頭部を搔いた。なんとなく、フェイトにそう言つて貰えると安心して、でもなんだか照れくさくて、素直にそう言えなかつた。

「そうだよ、はやてやさしいから。」

白い指先が、フェイトの金髪を梳いていた。午後の光の中できらきら輝いている。二人分。

「フェイトちゃんには、かなわへんなあ。」

独り言のようにはやては返した。

小さな寝息が聞こえるばかりの、他の皆が出払つていて静かなリビングは饒舌にしゃべるのを躊躇わせる雰囲気があった。この空気を壊してはいけないような、守

らなければならぬような、そんな雰囲気。多分、はやてが自分で作り出しているただの錯覚だけれど。

「ねえ、フェイトちゃん。」

呼びかけると、フェイトが振り向いた。

金髪が頬を滑って、光を湛える赤い瞳がはやてを映す。その白い頬に手を伸ばし、はやては身を乗り出した。唇を触れ合わせる。

少しの間だけ。

離すと、フェイトが耳まで真っ赤になっていた。

「え・・・あ・・・い、言つてよ、びつくりするよ。」

格好良く決めていることが多いけれど、不意をつくともフェイトは慌てる。真っ赤になつて目の縁に少し涙を溜めているフェイトは、いつもと違つて可愛い。はやてはフェイトの髪に指を通してながら、おでこを親指で撫でた。

「毎回、聞いてからしたほうが恥ずかしいんちゃう？」

歯を見せて笑うと、フェイトが不満げに頬を膨らませた。

「そ、そういうことじゃなくつて、・・・もう。」

その子供っぽい仕草にははやては顔を崩して、フェイトとその膝の上で気ままに眠るフェイトを眺めた。

「何があつたか、聞かないんやね。」

黒い尻尾の先が、呼吸のリズムに合わせて上下していた。

白い肌に金髪、赤い瞳に同じ声、同じ顔。

同じ名前。

何もフェイトが感じないわけは無かった。この使い魔を、はやてが作ったわけでもないことも知っている。使い魔の契約を上書きする方法をはやてが教わったのは、他の誰でもないフェイトだからだ。

誰かが自分にそっくりな使い魔を作って、はやてがその契約を上書きして連れているということは、解るのが必然だった。

誰が何の目的で作ったのか、考えないわけが、気にならない訳が無かった。良い理由ではないと、察せない訳が無かった。

それなのに、フェイトははやての手に自分の手を重ねて笑ってくれる。

「はやてが話せるようになったら、聞くよ。」

優しいのはフェイトの方だと思う。

全てありのまま話す勇氣がない自分を、そのままでいいと言ってくれる。

「うん、ありがと。」

いつもそれに甘えてしまう。

フェイトが笑って自分の頭を撫でてくれるのに、そのまま許されてしまう。

フェイトはひとしきりはやてを撫でると、お尻を少し動かしながら呟いた。

「なんかちよつと足がしびれてきたなあ。」

そうして、足の上で眠るフェイトを見下ろして、困っ

たように首を傾げる。はやては笑って忠告する。

「人の上で寝てるくせに、よだれ垂らしよることあるから気をつけてな。」

え、とフェイトが顔面を固めて硬直した。フェイトの今日の服装はラフだったけど、見た所質はよさそうだったから、涎を垂らされた日にはクリーニングだろう。黒の七分のシャツに、白いパンツのコントラストがシンプルだけれどよく似合っていた。

フェイトは涎を気にして、猫耳の子の口が何処にあるのかを身を丸めて探し始めた。顔を丁度フェイトの反対側に向けているために、涎を垂らされる危険性がどの程度のものか、フェイトからは解らない。はやてからはその気の抜けた寝顔が見えるけれど。多分、今日は涎を垂らさないだろう。ちゃんと口を閉じて寝ている。寝言も言っていない。フェイトによく似ている。けれど、随分奔放で随分子供っぽい子だった。

契約が切れる時、はやてを振り切ってフェイトが走って行く時、どうしてフェイトがはやての契約に答えてくれたのか、はやては本当の訳を知らない。振り返りもしないで走るフェイトははやてを見ていなくて、はやての手は届かなくて、もう消えて行ってしまおうと思った。

けど、真っ白い光が消えた後、フェイトは夜闇の中ただ杳然と立っていた。耳とお尻尾が風に揺れていた。それを、彼は黙って見つめていた。何故か、泣きそう

な顔で。

何かを彼が言ったのかもしれない、そう思つて、でもその言葉を訊けなかった。

フェイトがその後、零した言葉だけを鮮明に覚えていゝる。風に打たれて、虚空を見つめて囁いた声。

『私は、マスターのことが好きだった。

でも私じゃ、ダメだったんだね。』

あの時のフェイトの横顔が忘れられない。

彼はフェイトにさせていた事が明らかに成り、現在は管理局に身柄を拘束されている。フェイトは使い魔であるため対象にはならず、またはやてに契約を移行していたことから何にも問われてはいない。

でも、フェイトは時折、窓辺に座つて西の空を見上げている。

そして、誰も受け取ることの無い音無き声を、彼方の空に向かつて放っている。

多分、彼に会いたいのだろう。

もっと落ち着いて、フェイトが会いに行きたいと言つた時には、連れて行つてやるつもりだった。はやては彼に怒りを覚えているけれどそれでも、フェイトは彼の事が好きだから。はやてが世界で二番目なら、彼はフェイトにとつて世界で一番好きな人だから。今でも。

「なあ、フェイトちゃん。」

はやてはフェイトの隣に寄り添うように座り直した。

二人で窓際に座つて、何をするでもなく庭を眺めているなんて、なんだか歳を取つた夫婦みたいだけれど。

「なあに？」

フェイトは黒い三角耳を指先で突いていた。眠つたままでもフェイトは嫌がつて、耳をくるくると動かした。微かに震える柔らかな毛が、光を吸つて膨らんでいる。「なんでもない。」

開きかけた口を閉ざすと、フェイトがはやてを見つめた。硝子玉みたいな目だった。優しく、穏やかで、はやてをそのまま包み込んでしまふような眼差しで、フェイトははやてを見つめる。

フェイトは考えた事があるんだろうか。

フェイトは知つているんだろうか。

自分が数多くの実験の末に作られたものであるか知れないということ。それまでにいくつ失敗があつたかも知れないという事を。

聞いたことがなかつた。はやてはフェイトがそんなことを知つているかどうか、尋ねた事が無かつた。自分では考えた事もなかつたから。でも、エリオの事があつた時、フェイトは彼を作つたその技術者達にも会つてゐる筈だった。

だから、多分知つてゐるんだろう。

でも、一度もはやてにそのことを言つた事がなかつた。

「はやて？」

フェイトがはやてを覗き込んで問う。額が触れそうな

距離だった。

はやてはフェイトの頬を、両手で包んだ。血が通っていて、温かくて、笑うと可愛くて、話せば優しくして。

それなのに人は、彼女を死体の山から立ち上がったと言う。死体で出来ていると。

人形だと、役に立たないと。

「どう・・したの？」

どうもせえへんよ、とはやては声を振り絞った。

プレシアがフェイトをどう思っていたか、はやてには解らない。けれど、他の誰かにフェイトがそう言われたことがあったのなら、嫌だった。それを、自分には言ってくれない事が嫌だった。言い難い事かもしれない。でも、頼って欲しかった。迷惑じゃないから、うれしいから。時々、彼女の優しさが嫌いだ。

「でも・・。」

フェイトが気遣わしげに呼ぶ。

誰よりも優しい表情で、フェイトははやてを見つめる。

死体の山から立ち上がった人が。人形だと言いつてられた人が、何もかも解ってくれそうな目ではやてを。

「私、」

はやてはフェイトの頬を挟むと、一息に言い切る。

「私、フェイトちゃんのこと大好きやからな。

絶対、好きやから。」

突然の告白に、はやての手の中でフェイトが顔を赤らめた。

「え・・・、うつ、うん。」

窺うような上目遣いで、フェイトがはやてを見上げる。はやては何故かその様に安心すると、茶化すように続けた。

「え、フェイトちゃんの返事は『うん』だけなん？」

慌てたようにフェイトが腕を振った。

「あ、そ、そんなことないよ！」

私もはやてのこと、好きだから。」

そっか、とはやては微笑んだ。

そして、もう一度フェイトの方に身を乗り出す。

足元でいやあ、と声が聞こえたけれど、ちよつと見られるくらいええやろ、と思つてフェイトと額を合わせる。

間近にあるフェイトの顔。フェイトが静かに目を閉じた。息を呑んだのがわかる。

はやてはフェイトの唇に、自分の唇を

「ゴン、という音が庭に面する硝子の方から響いた。

「おかえりー。」

既に起きたフェイトが立ち上がってそちらに手を振る。はやては横顔に影が掛かったのに気付いていた。目を開けるのが怖い。フェイトの唇から、「う。」という呻き声があがるのが妙に鮮明に聞こえた。

『た、だ、い、ま。』

尻尾を立てるフェイトに答えるドスの利いた声が四

つ。

はやてが恐る恐る目を開けると、フェイトは既にそちらを振り向いて彫像になっていた。

そこにはお買い物物から帰って来た四人の騎士と二人の融合騎の姿があった。

「づい、ヴィータちよう怖い。」

硝子に額を付けてフェイトにガン飛ばしているヴィータに、思わずはやてはそう零した。シヤマルは笑顔で、シグナムは無表情で、リインは怒った顔で、ザフィラは冷徹な顔でフェイトを見下ろしていた。アギトだけが疲れ切った顔で上下逆になって浮いている。

「あ、えーっと・・・お邪魔してます。」

フェイトが枯れた声で答えた。

その腰がやや浮き上がる。

付き合っているのは知らせていても、こういう場面を見せる事はもちろんなかったわけで、そしてもう言い逃れの出来ない場面のわけで、いくらなんでも逆鱗に触れたかな、という予感がフェイトの背中を冷や汗となつて伝っていた。しかも家族がいない家で、なんて、まるで、「ふふ、こつちが黒猫なら、あつちはドロボウ猫ね。」シヤマルが見るものを虜にしそうなほど花やかな笑みを浮かべた。

「え、えっと・・・その・・・」

はやてが誘ったんだよ、なんて格好悪くて言えなくても、でもどうしようもなく。はやてははやてで顔を赤くし

て呆然としていて、だからフェイトは心を決めた。

「す、すみませんでしたあつ！」

逃げる。

フェイトは身体能力をフルに生かして、バネのようにリビングの奥へと飛び退ろうとした。だが、その足が何かに掴まれてつんのめる。

「うわあつ！」

「あ、フェイトちゃん！」

旅の鏡から出たシヤマルの手が、フェイトの足を掴まえていた。

「おお、開けてくれてありがとな。」

その間に、黒猫の方のフェイトが窓の鍵を開けて、ヴィータがどん、とリビングにあがった。転んだまま、足を掴まれたままのドロボウ猫の方が、じたばたと涙目でもがく。

「あー、えっと・・・お手柔らかにな？」

止めてくれないの!?

はやての台詞に目を剥くと、はやては無理無理、と手を振った。なんて残酷なんだ、と啞然としているうちに、空気が歪む程のオーラを身に纏った過保護な騎士様達が居並んでいた。その後ろに隠れて、三角耳をぱたぱた動かすフェイトが不安げにこちらを見つめていた。そつちも助けてくれないんだ、そうなんだ、なんてフェイトは観念しつつ、最後の良い訳をした。

「え、えーっと・・・まだしてなかったよ？」

『同じだあッ！！！』

ぎゃんぎゃん言い争う喧噪にリビングが包まれる。

はやてはついて行けないとばかりにソファに座るアギトに目配せをし、それから尻尾を足に巻き付けているフェイトを手招きした。涙目でうわああん、とばかりに守護騎士達に詰め寄られているフェイトは、自分のせいでそうなったんだけれど、骨ぐらいは残るだろうからしばらく眺めていようと思った。

耳を伏せ、フェイトがはやてにくつつく。

はやてが見上げると、フェイトは幼い顔から少し緊張を解いて、微かに笑った。